

現代日本語における外来語「フル」について

林 一*

Huru*: a Contemporary Japanese Loan Word Derived from *Full

Hajime Hayashi*

Abstract

A characteristic of contemporary Japanese is the large number of loan words. *Huru* is a frequently used loan word, with an steadily increasing number of compounds cited in some Japanese dictionaries. Adoption of *huru* involves changes in pronunciation, meaning and grammar in order to conform with the Japanese vocabulary system.

Compounds using *huru*, such as derivations of *full-course*, *full-face helmet*, the new word *heartful*, and some Japanese company names using *huru*, indicate that Japanese speakers have a good command of the word and find it useful and effective in communication.

キーワード

翻訳漢語、和製外来語、ハートフル、カタカナ社名、外来語批判

はじめに

現代日本語の大きな特徴の一つとして、外来語の急増がある^{注1)}。『広辞苑』第四版(1991年)、第五版(1998年)に新しく収録された項目のうち外来語がそれぞれ25%、35%を占めたと言う^{注2)}。このようなことはなにも数字をもって指摘されるまでもなく、私達の日常の身の回りの新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、各種の広告、映画の題名、歌詞、パソコンや携帯電話の取り扱い説明書…等にすこし触れるだけでも容易に実感される。このように現代日本語の中で比重が高まりつつある外来語を私達日本語話者はどのように考え、認識すべきなのか。これは極めて重要な問題であると考えるが、外来語の顕著な増加があ

*はやし はじめ：大阪国際大学人間科学部講師〈2003.9.26受理〉

まりにも直近の現象で現在進行中の事態なので客観的研究対象とはなりにくいのか、十分な検討がなされていないというのが現状である。

このような中で外来語に対する日本語話者の反応にはある種の「とまどい」が見られるように思う。この「とまどい」は、レコードやビデオテープがいつの間にかMD（ミニディスク）やDVD（デジタルビデオディスク）に変わっていることへの「とまどい」と通じるものがあるかも知れない。外来語に対するこのような「とまどい」は、それが新参で外来であるだけに、それに対して嫌悪や反撥を生み出し易く、ひいては「日本語の乱れの元凶は外来語にある」という外来語批判まで出てくる。外来語批判の一つの論拠に「外来語は分かりにくい」というものがあり、「町内会の人たちには分かるのか」（小泉首相^{注31}）という発言は世に受け入れられ易い。最近の外来語の増加が日本語史における漢字、漢語の伝来、翻訳漢語の大量創出に匹敵する現象と考えれば、この「とまどい」は無理のないことかも知れないが、とまどって立ちすくんでその粗を探すだけでは何も生まれてはこないだろう。

言うまでもなく、現代に生きる日本語話者は現代日本語の運用によってコミュニケーションを成立させている。そして円滑で効率的なコミュニケーションのために、日本語話者は意識するしないにかかわらず適切な語を選択している。その厳しくも柔軟な選択眼が対象とするのは、等しく和語、漢語、外来語であってその間にどのような区別もない。相次ぐ批判の只中であっても外来語がたくましく着実に増えているということは、日本語話者が円滑で効率的な言語活動にその外来語を必要としているということではないだろうか。選択眼は時にはぶれることもあるが、そのブレは長くは続かない。もし長く続いたら、当然ながら言語によるコミュニケーションが遠からず成立しなくなる。従って外来語の増加が行き過ぎと判断されたら、その行き過ぎの部分は静かに淘汰されるだけだ。

本稿では現代日本語の中で活用され、日本語語彙の中で重要な位置を占めるに至った外来語の一つとして、「フル」を取り上げたいと思う。

I 外来語「フル」の自由自在の使われ方

「フル」のいくつかの側面について検討する前に、「フル」が現代日本語の中でどのように使われているかを見てみたい。以下は筆者が主に新聞、雑誌の中で見つけた「フル」を使った語、句、文章であるが、出所は省略した。意味は日本語話者であればほとんど理解できると思うが、分かりにくいと思われるものには解説を加えた。

振袖フルセット フルコーラス フルムーンパス フルカラープリンター
 人生フルスイング（人生全力投球） フルタイム四輪駆動 プロ美顔フルコース
 婦人服フルアイテムバーゲン（婦人服にかんするものは何でも）
 フルコンタクト正道館（寸止めをしない空手道場）
 フルサービス証券（ネット証券に対して）
 フルローン（住宅購入資金の全額を貸付ける） フルハンドメイドの靴
 1600のフルパリエーション（カーテンの種類）

フルデジタル・ミニラボ機（デジタル式の家庭用写真現像機）

ワインのフルボトルサービス

チャーリーズ・エンジェル フルスロットル（映画の題名）

DVDで見られる「プロジェクトX」フルラインアップ！

ママはやりくり上手、家事の合間フル活用 ○○予備校 少人数制 フルサポート！
今回の景気対策はフルセット型で全部揃っているが、どこに重点がおかれているかわからない。

S,M,L,LL, フルサイズ取り揃えております。（洋服のサイズがすべてある）

バッテリーは、フル充電で約7時間利用できます。

このゴルフバッグにはフルオープンの大ポケットがあります。

用例は『フルセンテンス』主義で、わかりやすさ抜群。類語の用法の違いをこまぎれでなく、フルセンテンスで明示。

『健康物語フルケア』介護、入院、3大疾病の3つのフルケアプランでお客様の「万一」の保障から「毎日」の健康までをサポートします。

アウトレットモールを、百貨店などの「フル価格店」と巧みに使い分ける賢い消費者。
バリアフリー仕様、居室内はもちろん、水廻りからも段差を解消したフルフラット設計
昨年十月に合併した安藤薬業会社がフルに寄与して、十六年三月期も経常利益は最高益更新の予想。

II 外来語「フル」の受容

1 初期の受容

「フル」の原語である“full”という英語は英語語彙の中でも基礎的単語なので、日本人が英語文献に触れ始めた当初から良く目にしていたと思われる。基礎的単語であることは同時に多義的であることが多いから、“full”を不足なく理解、咀嚼することはもちろん容易ではなかったろうが、例えば“a river full of fish”, “fill one's glass full”, “full harvest”…等の文章を日本語として解釈し表現することは、それほど困難ではなかっただろう。これらの英語、英文が伝達せんとする状態、情況は、西洋であれ日本であれ人間生活においては普遍的なものであるからだ。「魚の多い川」、「コップをいっぱい満たす」、「豊作」と日本語で解釈、表現して十分に腑に落ちたと思われる。しかしこれはあくまでも英文を単に読解するという話である。

ところが“full”を構成要素とする複合語でかつ当時の日本人にとって新しい概念、事物を表す複合語、これを日本語文脈の中に取り込むとなると話は違ってくる。これらの複合語の多くは専門用語として出現し日本人はその対応を迫られたが、これを解釈し適切な訳語を造り出すことは容易ではなかっただろう。これはなにも“full”を構成要素とする複合語（専門用語）に限らず、様々な分野の数多くの複合語（専門用語）においても言えることであった。これに対応するに翻訳漢語を以ってするというのが明治、大正期の時代の意志であったしそこにこそ先人達の苦闘があった。現在の日本語話者は先人達の苦闘の成果を享受しており、それに対する感謝はいくらしてもし過ぎることはない。

「フル」(“full”)を構成要素とする複合語(専門用語)がいつ頃から日本語文献の中に見られるようになったかについては確たることは言えないが、明治29年(1896年)、正岡子規がベースボールを解説した時に「フルベース(満基)」という語を使っている^{注4)}。他にスポーツ専門用語としては「フルバック(最後衛)」、「フルマラソン」が昭和9年(1934年)発行の『運動競技用語辞典』に見られる。工業専門用語では「フルロード(全荷)」という語が、大正2年(1913年)発行の『工業大辞典』に記載されている。他の専門用語としては、【音楽】→「フルスコア(総譜)」、【服飾】→「フルドレス(正装)」、「フルスカート」(裾の広いスカートの総称)、「フルファッション」(足にぴったり合う婦人用の靴下)、【写真・映画】→「フルショット(全体像)」、「フルシーン(全景)」等がある^{注5)}。このように「フル」(“full”)を構成要素とする複合語(専門用語)は、明治中期以降の日本語文献に見られ始めるがその使用は専門分野に限定されていた。また「満基」、「最後衛」、「総譜」、「全荷」、「全景」が示すように多くの場合翻訳漢語が当てられていた。外来語「フル」が一人立ちし、専門分野を越えて広範に使用され出すのは、昭和それも戦後以降のことである。因みに、三省堂の『コンサイスカタカナ語辞典』では、外来語の借入時期を推定しているが、それによると「フル」は昭和期(昭和2~20年)である。

2 戦後の受容

戦後、外来語「フル」は日本語語彙の中で確かな位置を占め日本語文脈の中で活用されることになるが、その状況は国語辞書の各版の収録数の推移を追うことによって知ることができる。

第1表は、『広辞苑』第一版(1955年)から第五版(1998年)における「フル」と「フル」を構成要素とする複合語であるが、収録数は2→8→7→9→12と増加している。第2表は、『三省堂国語辞典』の第一版(1960年)から第五版(2003年)によるもだが、収録数は5→10→11→13→13と増えている。他の辞書で見ても同様で、『日本国語大辞典』第一版(1972年)と第二版(2000年)では16→23になり、『大辞林』第一版(1988年)と第二版(1999年)での収録数は14→21となっている。一般の国語辞書は、社会の言語特に語彙の状況を映す鏡であると同時に、規範的、標準的存在でもあるので、どの言葉を収録しどの言葉を削除するかについては保守的たらざるを得ない。逆に言えばこのような国語辞書の中で、収録数が着実に増えているということは、外来語「フル」の存在が現代日本語の中で着実に承認を受けつつあるものと考えて良いだろう。

現代日本語における外来語「フル」について

第1表

第一版 1955年	第二版 1969年	第三版 1983年	第四版 1991年	第五版 1998年
フル フルシーン	フル フルショット フルシーン フルストップ フルスピード フルバック フルファッション フルベース	フル フルストップ フルスピード フルバック フルファッション フルベース フルコース	フル フルストップ フルスピード フルバック フルファッション フルベース フルコース フルカウント フルネーム	フル フルストップ フルスピード フルバック フルファッション フルベース フルコース フルカウント フルネーム フルスイング フルタイム フルマラソン

(出所)『広辞苑』岩波書店

第2表

第一版 1960年	第二版 1974年	第三版 1982年	第四版 1992年	第五版 2003年
フル フルスピード フルバック フルファッション フルベース	フル フルスピード フルファッション フルベース フルカウント フルコース フルサイズ フルタイマー フルタイム フルネーム	フル フルスピード フルベース フルカウント フルコース フルタイマー フルタイム フルネーム フルスイング フルセット フルマラソン	フル フルスピード フルベース フルカウント フルコース フルタイマー フルタイム フルネーム フルスイング フルセット フルマラソン フルシーズン フルフェース	フル フルスピード フルベース フルカウント フルコース フルタイマー フルタイム フルネーム フルスイング フルセット フルマラソン フルシーズン フルフェース

(出所)『三省堂 国語辞典』三省堂

第3表

第一版 1972年	第三版 1979年	第一版 1994年	第二版 2000年	第四版 1987年
フル フルエントリー フルカウント フルコース フルサイズ フルシーン フルスカート フルストップ フルスピード フルセット フルドレス フルネーム フルハウス フルバック フルハンド フルファッション フルベース	フル フルエントリー フルカウント フルコース フルサイズ フルシーン フルスカート フルストップ フルスピード フルセット フルドレス フルネーム フルハウス フルバック フルハンド フルファッション フルベース フルライン	フルネルソン フルハウス フルバック フルパンツ フルハンド フルヒット フルファーストストライク フルファッション フルベース フルペンション フルマーク フルムーン フルライン フルレングス フルレンジスピーカー	フルドレス フルトレーラー フルドロ フルネス フルネスパンツ フルネルソン フルハウス フルバック フルパンツ フルハンド フルバンド フルヒット フルファーストストライク フルファッション フルフィル フルベース フルペンション フルボード フルマーク フルマラソン フルムーン フルメンバー フルモデルチェンジ フルライン フルレングス フルレンジスピーカー	フルスカート フルスクリーン フルスクリーンモード フルスケール フルスコア フルストップ フルスピード フルスロットル フルセット フルタイマー フルタイム フルダル フルターン フルターンキー フルドレス フルトレーラー フルドロ フルネス フルネスパンツ フルネーム フルネルソン フルハウス フルバック フルパワー フルパンツ フルハンド フルバンド フルヒット フルファーストストライク フルファッション フルフィル フルフェースヘルメット フルベース フルペンション フルボード フルマーク フルマラソン フルムーン フルメンバー フルモデルチェンジ フルライン フルレングス フルレンジスピーカー
第二版 1976年	第四版 1987年	フル フルエントリー フルオートプレーヤー フルカウリング フルカウント フルカラープリンター フルゲート フルコース フルストラクティッド フルコンテナ船 フルコンパチプレーヤー フルサイズ フルサーキュラースカート フルショット フルシーン フルスイング フルスカート フルスケール フルスコア フルストップ フルスピード フルスロットル フルセット フルタイマー フルダル フルターン フルターンキー フルドレス フルドロ フルネスパンツ フルネーム	フル フルエントリー フルオートプレーヤー フルカウリング フルカウント フルカラープリンター フルゲート フルコース フルストラクティッド フルコンテナ船 フルコンパチプレーヤー フルサイズ フルサーキュラースカート フルショット フルシーン フルスイング フルスカート フルスケール フルスコア フルストップ フルスピード フルスロットル フルセット フルタイマー フルダル フルターン フルターンキー フルドレス フルドロ フルネスパンツ フルネーム	フル フルエントリー フルオートプレーヤー フルカウリング フルカウント フルカラープリンター フルゲート フルコース フルストラクティッド フルコンテナ船 フルコンパチプレーヤー フルサイズ フルサーキュラースカート フルショット フルシーン フルスイング フルスカート フルスケール フルスコア フルストップ フルスピード フルスロットル フルセット フルタイマー フルダル フルターン フルターンキー フルドレス フルドロ フルネスパンツ フルネーム

(出所) 1972、1976、1979、1987年→『コンサイス外来語辞典』三省堂
1994、2000年→『コンサイスカタカナ語辞典』三省堂

国語辞書ほどの制約（社会の各層で広範に使われているか、使われるに足るかについて慎重に吟味する）を持たない外来語辞典では、その収録数は爆発的とも言える増加を見せている（専門用語の色彩の強いものがあり、当然ながら門外漢には分かりにくい語もある）。第3表は、『コンサイス外来語辞典』第一版(1972年)から第四版(1987年)と『コンサイスカタカナ辞典』第一版(1994年)、第二版(2002年)に載っているものだが、その収録数は17→19→18→37→53→59となっている（辞典の名称が外来語からカタカナに変わっているが、編集方針が引き継がれているので連続性があると判断される）。『コンサイス外来語辞典』第二版(1976年)、第三版(1979年)の収録数が19、18であったものが、第四版(1987年)では37に急増していることを見れば、1980年代以降の増加が顕著であることが分かる。

ただし何事も無から生じることが稀であるように、「フル」の使用が戦後、特に1980年代以降に大きく増加する背景に、明治中期からのこの語に対する日本語話者の長い学習期間があったことを忘れてはならないだろう。

Ⅲ 外来語「フル」の発音、語義、複合語における文法の誤り

外国語が外来語として日本語化する時には発音、語義、文法において様々な変容がみられるし、逆に言えば変容するからこそ外来語は日本語文脈の中で確固たる位置を占めることができる。

英語“full”の発音記号は[fúl]で一音節であるが、「フル」はローマ字表記すれば「huru」で二音節である。漢字による造語が基本的に「二音節十二音節」なので、「フル」が二音節であることは造語をする際の利点となっている。英語の子音“f”の発音は下の歯で下唇を少し噛むが、「フ」の発音は「無声両唇摩擦音」で、ファイト、ファイブ、フラワー、フルーツ等の「フ」と同じである。英語“full”が外来語「フル」になる時、発音はこのように変容するが、「フル」の発音自体は日本語話者にとって難しいものではなく馴染みがある（雨が降る、首を振る、古い、古本）。発音に馴染みのあることも、「フル」が活用される要因の一つであるだろう。

英語“full”の語義は多様で『新英和大辞典』第五版（1981年）では、11分類に亘っているが、外来語「フル」の語義は非常に限定されている。日本の辞書では「いっぱいであるさま、全部、十分」（『広辞苑』）、「いっぱい」（『三省堂国語辞典』）、「一杯、十分、最大限」（『コンサイスカタカナ語辞典』）となっている。ところで「いっぱい、いっぱいであるさま」とは、具体的にどのようなことなのだろうか。一つには“a river full of fish”（魚の多い川）等のフレーズから容易に理解される「多くの、たくさん、いっぱいある」の語義である。しかし現代日本語での「フル」の使われ方を検討すると、意外にもこの語義で使用されることは少ない。すなわち「フルに」、「フル+〇〇」と表現したい時この語義では使いにくいのであり、この語義で「フル」を使いたいという日本語話者の欲求は、後述する「ハートフル」と言う語に集中している。

次に英語“full”の語義に「寸法がたっぷりの、ゆとりある、ゆるやかな」というものがあり、この語義を使った複合語は服飾専門用語として日本でも使われる。例えば、「フ

ルスカート」(裾のゆったり広がったスカートの総称)、「フルネスパンツ」(たっぷりした、はき心地のよいズボンの総称)、「フルファッション」(婦人用の長靴下、脚線美をあらわせるよう脚部の形に応じて網み目を増減してある)等である。しかしこれらの言葉は現状ではあくまでも服飾関係者や服飾に興味、関心を持つ者だけが理解できる専門用語であり、一般の者には「理解しにくい外来語」と言える。日本語話者がこの語義を消化し専門領域を越えて使いこなすには至っていない。というよりはその必要性を感じていないということだろう。

また英語“full”には「(仮、一時的でない)正式の」という語義があり、“full professor”(正教授)、“full member”(正会員)、“full leather”(総革)、のように使われるが、これらは当然ながら外国語である。外来語「フル」を使った「フルプロフェッサー、フル教授」が日本語文脈の中で使われているとは言えないだろう。ところで日本語の「フルメンバー」の意味は、「メンバー全員、全メンバー」(『コンサイスカタカナ語辞典』)ということであり、「故障者も復帰したので決勝戦はフルメンバーで臨む」のように使う。ここには英語“full member”(正会員)と外来語「フルメンバー」の間に意味の相違が見られる。「フルメンバー」が日本語文脈で独自の使われ方をしているのあり、これは日本語話者が「フル」を使う時に「正式の」という語義に不慣れで、無関心、無頓着であったためかと思われる。ところが最近、「正式の」という語義を担う「フル代表」という言葉が使われ出している。「サッカーワールドカップフル代表」のように使われるが、その意味は「サッカー競技試合の最高の舞台であるワールドカップに出場する国の代表選手」ということである。この言葉を十分に理解するには、国際試合であってもワールドカップ以外の試合には「フル代表」という言葉を使わないという背景を知る必要があるが、近年の日本におけるサッカー熱の高まり、そしてU-21代表(代表選手が原則21才以下であること)、オリンピック代表(オリンピックの試合に出場する選手)という「フル代表」と対概念を表す言葉も使われ出しているので、日本語話者の「正式の」という語義への理解が今後深まることも考えられる。

このように、英語“full”が多義的に使われるとしても、外来語「フル」の場合かならずしもそうではない。では現代日本語ではどのような語義で「フル」を活用しているのか、すなわち最も重要な語義は何かと言えば、それは「目いっぱい、限度いっぱいの、ありったけの、あらん限りの」である。漢語では「最大限(の)、全面的(な)、無削除(の)」が相当するだろう。「フル」の語義をこのように把握することによって、日本語話者は「フル」を自家菜籠中の物とすることができたのであり、逆に「フル」はこのように把握されることによって豊かな造語力を発揮することができたのである。「フルスピード」、「フルコース」、「フルスイング」、「フル生産」、「フル装備」、「フル投資」、「フルイニング出場」、「フルサポート」、「フルアクセス」、「フルエントリー」、「フルモデルチェンジ」、「フルカラー印刷」…等の言葉は「目いっぱいの、最大限(の)」の語義を思い浮かべれば、素直に理解できるだろう。情報発信者は「フル」に「目いっぱいの、最大限(の)」、別の言葉で言えば「中途半端ではない」という気持ちを込め、「フル」を強調語として使うことが多いが、情報受信者も「フル」の強調語としての役割を大枠において理解できる。つ

まり「フル」の「目いっぱい、最大限(の)」という語義について、日本語話者の間で共通の理解が成立していると言えるだろう。

外来語「フル」についても文法上誤って使用されたり、原語の複合語の構成要素が省略されたりすることがあるが、以下に例を示す。

- “full-fashioned stockings” → 「フルファッション」
動詞fashionが過去分詞形になっていない。stockingsが省略されている。
- “fully automatic player” → 「フルオートマチックプレーヤー」
fully (副詞) がfull (形容詞) のまま使われている。
- full marks → 「フルマーク」
marks (複数形) がmark (単数形) になっている。
- “full length marathon” → 「フルマラソン」
length (距離) という語が省略されている。

外国語が外来語になる時、なぜこのような文法の間違いや勝手な省略が生じるのか。その理由は、もし外来語が元の外国語の文法、語構成に忠実であらねばならぬとしたらその外来語は日本語文脈の中で生き生きとした生命力を持つことができないからである。外来のラーメンとカレーがなぜ日本の国民食とも言えるほどになりえたのか、理由は同じである。また文法の誤りや勝手な省略があったとしても、その外来語が日本語文脈のコミュニケーション上の障害になっているとは考えにくい。ただ外来語の元になっている外国語はあくまでも外国語であって、専門家はいざ知らず平均的な日本語話者はその馴染みのない外国語の文法、語構成に鈍感で無邪気でいられるのは確かである。英語話者が英語由来の外来語に対して違和感、わかりにくさ、とまどいを感じるのもこのあたりに原因があるだろう。

Ⅳ 外来語「フル」を使った和製外来語

和製外来語とは、日本で外国語の単語を元に外国語らしく造った語のことであり、「テーブルスピーチ」、「イメージアップ」、「バックミラー」、「ナイター」の類である。和製外来語が造られ流通するには、その言語集団の幅広い層に元の外国語について一定レベルの知識が必要なので、現代日本語では和製外来語と言っても殆どが和製英語となる。外国語を元にいかに新しい語を造り出すかということについては、日本語は過去に貴重な経験を持っている。すなわち明治期の翻訳漢語(近代漢語)の創出である。漢籍等の言葉を翻案するか漢字を組み合わせる新語を造るか、いずれにしても簡単な作業であった筈はないが、「革命」、「思想」、「文化」、「演説」、「経済」、「帰納」、「演繹」、「元素」、「汽車」、「為替」、「切手」…等、大量の翻訳漢語が生み出された^{注6)}。

数多くの翻訳漢語が造られ流通し得たということは、当時の日本社会の幅広い層にそれを受け入れ消化する素地がなくてはならないが、当時の知識人の学問的素養は漢文にあったし、庶民層も寺子屋教育を通じて漢語、漢文に親しんでいた^{注7)}。福沢諭吉は後に大阪で蘭語、江戸で英語を習得するが、豊前中津に居た頃、二、三の塾に通い漢学を学んだ。

『論語』、『孟子』、『詩経』、『蒙求』、『世説』、『左伝』、『戦国策』、『老子』、『莊子』の手ほどきを受け、『史記』、『前後漢書』、『晋書』、『五代史』、『元明史略』を独学自習したと言う。また「殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五巻の内、三、四巻でしまうのを、私は全部通読、およそ十一度び読み返して、面白いところは暗記していた^{註8)}。」とある。なにも福沢諭吉だけが飛び抜けた例外的な存在であった訳ではないだろう。そしてもっと大事な点は彼や彼以外のエリート知識人を取り巻くように、漢学素養という広大な裾野が広がっていたことである。

ところで外来語批判の一つの論拠に知的怠慢説とでも呼べる考えがある。すなわち明治の先人達は脳髓を絞って外国語を翻訳(義訳)したのに較べ、我々現代人は極めて安易にカタカナ音訳で済ませている、これを知的怠慢と言わずして何と言うかという論法である。また中国語では外国語をなんとか翻訳(義訳)しようと努力しているのに較べ、日本語はなんと情けないという考えも同列であろう。しかし明治期と現代の日本では社会全体の学問的素養の背景が決定的に違っていること、そして常用漢字数1945字の現代日本語と中国語では、「使える」漢字数が圧倒的に違っていることを考えれば、知的怠慢説は自虐趣味に過ぎ建設的な考えとは言えない。

外来語についても日本語話者がこれに習熟するにつれて、外来語の語義をもとにこれを組み合わせて(語義を限定したり慣れた語構成を採用することが多いが)独自に新しい語を造り出したとしても、これは自然な流れである。ここには和製漢語(その多くは明治期の翻訳漢語)の背景にある精神、つまり物事を学び取るだけでなく自らの思い、創意工夫によってこれを自在に活用するという精神と通底するものがあると思われる。

いくつかの和製漢語についても(中国の)漢語との間でそのオリジナリティーを巡って本家争いが見られるように、和製外来語と(外国語由来の)外来語の線引き、語源の特定が難しい場合がある。「フル」を使った複合語でも辞書によって異なる解釈が見られる。例えば『日本語大辞典』では「フルカウント」を外来語としているが、『三省堂国語辞典』では和製外来語としている。ところが「フルコース」については逆の解釈がおこなわれている。また同じ辞書でも後の版で修正していることもあり、『三省堂国語辞典』第二版では「フルベース」を外来語としているが、第三版以降は和製外来語としている。

荒川惣兵衛の『外来語辞典』(1967年)には、「フル」とその複合語は30収録されているが、和製と認定したものはない。これは当時はまだ「フル」を使った複合語の日本語における存在感が薄く、出自を問題とする意識が低かったためかと思われる。「フル」の受容過程をみても分かるように、「フル」を使った複合語が顕著に増加し存在感が始まるのは1980年代以降だが、「フル」を使った和製外来語が増加する(あるいは認定される)のもほぼ同時期である。『コンサイス外来語辞典』第三版(1979年)、第四版(1987年)、『コンサイスカタカナ語辞典』第一版(1994年)で和製とされた語数の推移は、1→4→10となっている。また『三省堂国語辞典』第三版(1982年)で和製と認定されたのが2語であったが、第四版(1992年)では5語にふえている。これに対し『広辞苑』では「フル」を使った複合語が和製か否かの区別はまだ重要ではないと考えているのか、第五版(1998年)に至るも出自の特定をしていない(「フルーツパーラー」、「オフィスレディー」等は和製

と認定)。しかし「フル」を使った複合語の存在感が今後高まるとすれば、その出自に関心を向けざるを得なくなるのではないだろうか。

最後に、『コンサイスカタカナ語辞典』第二版(2000年)に載っている「フル」を使った和製外来語を列挙すれば以下の10語(59語中)である。「フルゲート」、「フルコース」、「フルコンパチプレーヤー」、「フルバンド」、「フルフェースヘルメット」、「フルベース」、「フルペンション」、「フルマラソン」、「フルメンバー」、「フルモデルチェンジ」。

V 「ハートフル」

最近「ハートフル」という言葉を特に宣伝文でよく目にする。「ハートフルバレンタイン」(阪急電車のPR紙)、「ハートフルクリーニング」(クリーニング店の看板)、「ハートフルでいい仕事」(引越し運送会社の宣伝文)、「ハートフルコミュニティーDAITOH」(住宅建設会社の宣伝文)、「Heartful Aqua」(ユニチカスイミングスクール)の如くである。「ハートフル」の語義を理解することは、日本語話者にとってそれ程難しくはない。「ハート」は日本語の中で確固たる位置をしめている外来語で、「心臓」と解されることは少なく、「心、心情、愛情、思いやりの感情」と解される。そして「ハートのこもった手紙」(『広辞苑』)、「彼女のハートをとらえる」(『大辞林』)のように使われる。そしてこの時の「フル」の語義は、「たくさんの、いっぱいある」であり、中学生段階の英語教科書に出てくる“be full of”の文型を通して馴染みがある。また「カラフル」、「パワフル」、「ビューティフル」、「ワンダフル」等のよく目にし耳にする外来語から、「〇〇+フル」の語構成も分かり易い。日本語話者はこれらの既知知識から連想を働かせて、「ハートフル」の語義を「心がこもっているさま、優しさにあふれているさま」(『コンサイスカタカナ語辞典』)、「心から、心を込めた、真心をもった」(『日本語になった外国語』)と無理なく理解することができる。「ハートフル」を使って情報を送る側も、受ける側のこのような理解を前提にしている筈で、両者の間に共通の理解が成立している。

日本語文脈の中で素直に理解され流通している「ハートフル」だが、“heartful”という語は不思議なことに現代の多くの英語辞書には載っていない。『Oxford English Dictionary』や他の大型の辞書には載っていて、語義はほぼ「ハートフル」と同じだが、古語の扱いである。「ハートフル」と同じか近い語義の現代英語は“heartly”, “heartfelt”, “cordial”である(「日興コーディアル証券」という会社がある)。“heartful”という語を誰か(日本語話者である可能性が高い)が『Oxford English Dictionary』から見つけ出して来て日本語文脈の中で「ハートフル」として使い出したのか、あるいはそれが既に存在していることを知らずに、「ハート」と「フル」を組み合わせ「ハートフル」としたのか分からないが、もし後者ならばこれは和製英単語(国字)である。中国伝来の漢字を学び始めた日本人はこれに習熟すると、日本の国情に合った漢字を独自に造った。畑、峠、辻、鯛、鱈、柿、働、躰、等の和製漢字であり国字と言われる。平安時代初期には既に400字余りあり^{注9)}、現在1500余字あるいは研究者によれば2700余字あると言われている^{注10)}。外来語に習熟するにつれて国字に相当する和製英単語が造られたとしても不思議ではないだ

ろう。

とは言え、「ハートフル」は比較的新しい語であってまだ日本語として広く認知されているとは言えないかも知れない。『広辞苑』、『日本国語大辞典』、『大辞林』では、それぞれの直近版においても「ハートフル」を収録していない。そして『コンサイスカタカナ語辞典』での収録は第一版（1994年）以降だし（前身の『コンサイス外来語辞典』の第一版～第四版には収録されていない）、また『日本語になった外国語』での収録も第一版、第二版にはなく第三版（1994年）からである。「ハートフル」が一過性の新語のままで終わりいつしか消えていくのか、広く使われて一般の辞書にも収録されることになるのかは、「ハートフル」の生命力次第と言わざるを得ないが（これはどのような語についても妥当する）、すこし考えるだけでも「ハートフルケア」、「ハートフルプレゼント」、「ハートフル教育」、「ハートフルクッキング」等が思いつくので、「ハートフル」の生命力は案外強いと考えられる。

VI 外来語「フル」を使った日本の会社名

先に現代日本語の大きな特徴の一つとして外来語の急増があると述べたが、これと軌を同じくするかの如く戦後一貫して日本の会社名のカタカナ表記への流れが着実に進行している²¹⁾。会社名のカタカナ表記には外来語由来のもあれば、漢字表記のカタカナ化もあるが、いずれにせよ外来語がもつ先進的、国際的というイメージを体現し先進的、国際的な企業にならんとする思いがこの流れを推進してきたと考えられる。この大きな流れの中で外来語「フル」を使った会社名が見られることは非常に興味深い。外来語「フル」が自由闊達に使われ現代日本語の中で堂々たる位置を占めるに至った一つの傍証と思うからである。

以下「フル」を使った会社名のいくつかを見てみたい。

「日本フルハップ」

「日本フルハップ」は略称で、正式名称は「財団法人 日本中小企業福祉事業財団」（中小企業の健全な発展と福祉の増進に寄与するため、昭和63年7月に設立された労働省《現厚生労働省》許可の公益法人）だが、対外的には「日本フルハップ」の旗印で事業活動を展開している。同社のホームページに「フルハップは英語の『FULL（いっぱい、満ちた）』、『HAPPY（幸せな）』を結びつけた造語で、会員の皆様が『幸せいっぱいであること』を祈念したネーミングです。」とある。

「フルキャスト」（英文表記では、Fullcast）

「フルキャスト」は、あらゆる業種、分野に人材を派遣、配置することを事業目的とした人材派遣会社で1990年設立、2001年6月には株式をジャスダック市場に公開。創業者が事業目的を簡潔に表現すべく“full line casting”なる言葉を自ら造り、社名を付ける時に「フルラインキャスティング」では長過ぎるので省略し「フルキャスト」とした。

「アイフル」（英文表記では、Aiful）

「アイフル」の業種は消費者金融で1978年設立、1998年には株式を東証、大証Ⅰ部市場

に上場。1982年に株式会社丸高から現社名に社名変更しているが、由来は次の如くである。Affection (愛情)、Improvement (努力)、Faithfulness (誠実、信頼)、Unity (結束)、Liveliness (生活)、の五つの英語の頭文字をとってAIFULとするが、「愛フル (愛がいっぱい、愛があふれている)」の意味を込めている。また同社の会社案内には「アイフルのすべての事業を支えるのは、ハートフルなサービスマインドです」とある。

「アイフルホームテクノロジー」(英文表記では, Eyeful home technology)

「アイフルホームテクノロジー」の業種は住宅建設で、この「アイフル」は英語“eyeful”をカタカナ音訳したもので、語義は「たっぷり見ること」(『新英和大辞典』第五版)である。同社の説明では、「住宅建設にはとにかく価格面、品質面で不透明性があった。そこで当社では、消費者に大きく目を開いて、よく見てから住宅購入をするようにすすめている。そして当社は「アイフル」(“eyeful”)を掲げることによって、消費者の信頼が得られる企業を目指している」とのことである。同社では企業理念のPR活動に力を入れているが、「アイフル」→“eyeful”に思い至る人はまだまだ少数で「愛フル」ととられることが多いそうだが、それでも問題はないと考えている。

おわりに

これまで見てきたように、外来語「フル」は現代日本語の中で自由闊達に使われている。

「フル」が日本語文脈の中に現れてから100余年が経ち、特に戦後、外来語全般が増加するのに歩調を合わせるかの如く「フル」の使用も増え、今では「フル回転」、「フルインング出場」、「フルサポーター」、「フルオーダー」等の言葉に触れても大きな違和感を感じないとさえ言えるだろう。外来語の多用、活用は習熟をもたらすそして習熟は応用を生む。明治期の翻訳漢語に相当する和製外来語も最早珍しくないが、「フル」を構成要素とした複合語にも和製と認められるものがすくなくない。また語種分類では混種語とされる「フル投資」、「フル充電」、「フル勤務」、「フル電動方式」等の言葉もよく目にする。また現代日本語の中でも新語に属するが、「ハートフル」は刺激的な語である。『Oxford English Dictionary』等の辞書には収録されているので純然たる国字とは言えないとしても、現代日本語の中で「真心をこめた」という語義で復活し使われ出したとすれば、「ハートフル」は国字的な語と言い得るのではないかとの思いをかきたててくれる。さらに日本の会社名にも外来語「フル」が使われていると言うことは、「フル」が日本語話者の間で既に慣れ親しまれている語であることを如実に物語っていると言えないだろうか。

では何故、外来語「フル」が現代日本語の中でかくも自由奔放に使われるようになったのだろうか。結論は簡単であり、そこに何らかの必然性、必要性があったからとしか言いようがない。「フル」の使用に必然性はない、使わなくても済むのに単にハイカラでユニークは感じを与えるから使っているに過ぎないと考えるのは、「フル」の使用の着実な拡がりを見る時、やはり皮相的な見方と言わざるを得ないだろう。外来語「フル」の主要語義に相当する和語、漢語は「目いっぱい、ありったけ、最高の、最大限の」であるが、ど

の語を選択するかは日本語話者の自由である。これらの語種の中で外来語「フル」は多くの文脈において（もちろん全ての文脈ではない）、分かりやすさ、簡潔さ、歯切れの良さ、強調する力の大きさにおいて他の和語、漢語を凌駕しているすなわち日本語の効率的運用に役立つと日本語話者は感じ、考えたからこそ、「フル」の使用は着実に増加して来たのではないだろうか^{注12)}。

最後に「フル」という外来語を扱ったからには、「外来語の急増は日本語を破壊する」という外来語批判について少し考えを述べたい。外来語批判にもいくつかの論があって、筆者の勝手な分類では本文中に述べた「知的怠慢論」の他に、「日本社会、文化、伝統衰退論」、「日本という国、民族の品格劣化論」、「純粹攘夷論（国粹主義、原理主義）」…等があるが、ここでは「分かりにくさ論」を取り上げる。「分かりにくさ論」とは、簡単に言えば漢字を使った言葉は分かりやすい、たとえ見慣れない語でも漢字の語義から言葉の意味が類推できる、しかるに外来語はとっかかりがないので見慣れない語はお手上げで全く分からないという論である。この論には確かに一理があり、誰しも分からない外来語に出くわして腹立たしい思いをした経験があるだろう。しかし外国語、外来語の知識が少ない段階では、類推力を働かせることが難しいにしても、知識が増えるに従って類推力が高まるのも事実である。戦後教育を受けた殆どの人間にとって英語は、ほぼ必修科目であって日本語話者全体の英語に対する知識は過去に較べ大きく増えているし現在も増えつつある。極端な例かも知れないが、「インフォームドコンセント」（国立国語研究所、外来語委員会の言い換え案では「納得診療」という初めて触れる少々難しそうな言葉の意味でも、既存の英語の知識を働かせれば文脈の中でその意味を類推することは不可能ではないのだ。和語なら分かるという思い込みも怪しい。生活様式の変化によって「へっつい」や「かや」…等の語は急速に分かりにくくなっている。また漢語は漢字から意味を容易に理解できると言い切れるだろうか。「恩沢、海彼、資益、修治、印行、簡短、要略、載録、緒彦…」これは新村出が『広辞苑』第一版（1955年）に寄せた自序から取り出した言葉（漢語）であるが、果たして分かり易いと言えるだろうか。もしこれらの言葉が会話の中で使われたらどのようなようになるだろうか。当然ながら言葉が分かる分からないは、その言葉が和語か漢語か外来語か混種語かに関わりがない。「分かりにくさ論」はこの当たり前のことを忘れてあるいは見ようとしないように思える。

私の友人に鳥山（とりやま）という姓の者がいる。彼は営業マンで、見知らぬ人に電話で商品の勧誘をすることがある。電話を受けた相手はかなりの確率で、「えっ、もりやまさんですか」と言うそうである。そこで「いえ、もりではなくてとりです」と言うと、それでも「もりやまさん？」と返ってくる。そこは彼も慣れたもので、次に「あの、バードマウンテンのとりやまです」と言うと、「あ！ とりやまさん」となるそうである。このエピソードを最後に紹介したのは、「町内会の人たち」もなんとか分かり易い言葉を使ってコミュニケーションを図っているという言語的事実である。

脚注

- 1) 外来語とは、もとは外国語（主として西洋語）であったものを日本語として使うようになった語であり、日本語語彙を語種別に分類した場合の和語、漢語に対立する語のこと。漢語も外来のものだから外来語として扱うべきだとする考えがあるが、①流入（借用）の歴史が古く日本語化が圧倒的に進んでいる、②表記が決定的に違う、の理由によって本稿では漢語と外来語を区別する。漢語という言葉自体が、漢語も外来（借用）のものであることを表しているし、また日本語の変遷は和語、漢語、外来語の対立軸を持つ方が、その対象に深く迫ることができると思う。次に最近の外来語の増加を背景に、外来語をカタカナ語に言い換える動きがある。このこと自体外来語の日本語化がより進んだことを示すものと考えれば興味のあることだが、あまりにも日本語の現在の表層だけに目を奪われ過ぎていていると思う。カタカナ語という概念では、日本語が外来（借入）の語によってその内容を充実させてきたという~~ことを看過する恐れがある。~~
- 2) 『広辞苑ものがたり』、岩波書店、1998年、p19
- 3) 2002年春の経済財政諮問会議で外来語が続出した時、小泉首相が「町内会の人たちは分かるのか」と発言。この発言をうけて国立国語研究所は外来語委員会を作り、なじみが薄く一般に定着していないと思われる163の外来語の言い換えの検討を始める。2002年末、2003年春、夏に中間発表をし、2003年10月に最終発表する予定。その後も半年に一回程度の頻度で新たな言い換え語を提案する。
- 4) 正岡子規、『松玉液』、『子規選集②』、増進会出版社、2001年、p294～302
- 5) 荒川惣兵衛、『外来語辞典』、角川書店、1967年、p1146～p1154
- 6) 志村良治、『日本語の語彙と中国語の語彙』、『講座日本語の語彙②日本語の語彙の特色』、明治書院、1982年、p217～p220
- 7) 橋本萬太郎、鈴木孝夫、山田尚男、『漢字民族の決断』、大修館書店、1987年、p332～p338
- 8) 福沢諭吉、『福翁自伝』、岩波文庫、第49刷発行、2003年、p15～p16
- 9) 『日本語百科大辞典』、大修館書店、1995年、p334
- 10) 日本経済新聞、2001.7.12朝刊、文化欄
- 11) 林 一、「表記から見た日本の会社名 特にカタカナの使用について」、大阪国際女子大学紀要26号1（2000年）
- 12) 筆者は本稿のテーマを考えている時、いつも心細さを感じていたが、小松英雄氏の『日本語の歴史』、笠間書院、2001年、と『日本語はなぜ変化するか』、笠間書院、1999年、の中に流れる氏の考えに励まされてきた。特に、『日本語の歴史』、p63～p64に述べられている「結論を先取りするなら、原理的に言って、カタカナ語が増えても日本語の将来を心配する必要はない。なぜなら、他の言語とどれほど濃密に接触しても、どの語を借用してどのように使用するかは、借用する側の主体的な選択だからである。」「原理として一般化するなら、言語は効率的運用に役立たない構成要素を体系の中に抱え込むことはない。それを逆に捉えるなら、言語体系を構成するすべての項目は、他の項目が果たすことのできない固有の役割を担っている。」という考えを、現代日本語における外来語の意味を考える時の指針としてきた。またフィッシャー氏の「言語の純化主義者がつねに失敗したのは、『借用は言語の最大の力の一つである』ことを認識していなかったからである。人類の言語は石ではなく、スポンジである。スポンジのように吸収力があるからこそ、言語に優れた創造性・適応性・実用性が生まれる」（スティープン・ロジャー・フィッシャー、鈴木晶訳、『ことばの歴史』、研究社、2001年、p262）という考えにも啓発された。